

### 3) ヒノキと(サワラ)と(アスナロ)=檜と(榎)と(翌檜)

ヒノキはヒノキ科の常緑高木で福島県以南、屋久島までの山地に広く自生する。日本の特産種で高さ 40m、直径 2m に達する。樹皮は赤褐色で縦に裂けてうすく剥げる。枝葉は平たく伸び、葉は緑色の鱗片状となり、雌雄同株で春、雌花は枝の梢に、雄花は紫褐色で細枝の先につく。果実は球果で枝の上に群生してつき、熟すると左右に翼を持った種子が散る。和名の起こりは「火の木」で、昔この木を擦り合わせて火を起こしたことに由来する。しかしこの説には異論もあり、音韻学的には古代の『ヒ』の音には甲乙の二種類があり、火は乙類に属し檜は甲類であり、この説を否定する学説もある。確かに『新撰字鏡』などでも「檜 比乃木」と記しており、古文獻には火の木という表記は見られない。しかし檜と火とは昔から密接な関係にあり、今後の研究の成果が待たれるところである。別称としてはシノギ、イシツピ、ヒバヒ、サクラヒなどと呼ぶ地方もある。学名は『*Chamaecyparis obtusa*』で、属名はギリシャ語で小さい糸杉を意味しており、果実が糸杉に比べると小さいことによる。種小辞は丸みを帯びたという意である。イギリスでは『hinoki cypress』、中国では『扁柏』『檜』であるが、ともに誤用で、それぞれコノテカシワとイブキを指している。

檜は福井県の鳥浜貝塚から杭として多数出土している。これは縄文前期のもので、湖中に立てて棧橋にしていたものと思われる。また鳥取市布勢の縄文後期の遺跡からは、檜の繊維で編んだ籠も見つかっている。こうした出土品は檜に含まれているヒノキチオールという芳香族の化合物が腐敗を押さえたためで、ヒノキチオールには殺菌力や抗菌作用があり、今後も檜の遺物が出土する可能性が期待される。

檜が文献に登場するのは『日本書紀』の「神代卷上」である。前項の杉のところで見てきたように、胸の毛を抜いてこれが檜になったというので、その後には

檜は、もて瑞宮(ミツノミヤ)を作る材とすべし。被(マキ)はもて現(ウツ)しき青人草(アホトクサ)の奥津棄戸(オクツカヘ=甕のことで棺桶のこと)に持ち臥(フ)さむ具(ツケ)へにすべし。[中略] 棄戸、此をば須多杯(スカヘ)と云ふ

と記されており、瑞宮を作る材としている。檜は木目がまっすぐに通り、緻密で芳香があり耐久性も高く、しかも表面の仕上がりが美しく、あらゆる木材のうちでも最も狂いのない木の一つであった。このため日本の古い木造建築は檜を用いたものが多く、現存する最古の木造建築物である法隆寺や、正倉院、伊勢神宮の神殿には多くの檜が使用されており、特に伊勢神宮では内宮、下宮、別宮を合わせて 15,000 本もの檜が用いられている。その上、檜の皮は屋根を葺く材料としても極めて優れていた。これが『檜皮葺』(ヒワダブキ)というもので、神社、仏閣、宮殿など、瓦がなかった時代には檜の皮で葺いたのである。この点は前述の杉の粗末さとは好対照である。

『枕草子』の「花の木ならぬは」のなかには

檜の木、真竹ちかからぬものなれど、三葉(ミツバ)四葉(ヨツバ)の殿づくりも

をかし、五月に雨の声をまなぶらんもあはれなり。

と記されている。檜は身近なものではないが、宮殿の三棟、四棟と連なる様は見事であるとした上で、以下に漢詩の一説を引用している。その漢詩の内容というのは、「長潭五月の雨、氷気を含み、孤桧終宵、雨声を学ぶ」というもので、冷たい雨がふりそそぎ、岸边にそびえる一本の檜からは雫の音が絶え間なく聞こえる」というものである。また『常陸国風土記』では次のように記されている。

野の北に、櫟(イビ)・柴(クサキ)・鶏頭樹(カハデノキ)・檜(ヒノキ)往々森々(ヨヨヨヨヨ)  
に、自ら山林(ヤシ)を成(ナ)せり。

とあり、昔はいたるところに檜の自然林があったことがうかがえる。『万葉集』にも9首が詠われており、柿本人麻呂は以下のように詠っている。

鳴る神の音のみ聞きし巻向(マキムク)の 檜原の山を今日見つるかも  
鳴る神というのは本来は雷のことで、ここでは音にかかる枕詞で、噂では聞いていたがという意味である。巻向は桜井市の北部、三輪山の東北部にある海拔 567m の巻向山のことで、昔から檜の美しい林のあることで知られていた。現在でも檜原神社のあるあたりには檜の林が残っている。歌の意味は「今日その檜の林を見て感動した」というものである。『万葉集』には他にも「真木」として詠われたものが、17首もある。檜は建築材料として最も優れた木であったところから、真木とも呼ばれていたとも思われ、橘奈良麻呂の歌として、

奥山の真木の葉しのぎ降る雪の 降りが増すとも地(ツチ)に落ちめやも  
と詠み、檜の葉に雪がつもっても、所詮は土に落ちて行くといっている。

さて檜と火の関係である。かつては発火台と発火棒を用いて、発火棒を錐で差し込むように、発火台と摩擦させることによって火を起こしていた。この発火台のことを『火鑽臼』(ヒサリウス)といい、発火棒のことを『火鑽杵』(ヒサリキネ)と呼んでいた。現在でも出雲大社の『火継ぎ神事』や、伊勢神宮の神饌のために火を起こすときにはこの火鑽臼が用いられており、これを檜で作っていたのである。

檜は他にもいろいろなものを作るのに用いられ、檜をうすく削った板を重ねて檜扇(ヒオウギ)を作ったが、これは貴族が正装するときの大事な持ち物であった。同じく経木のように薄い板を網代に編んで、晴雨兼用の笠も作った。檜舞台は檜で床を張りめぐらせた舞台のことで、転じて自分の腕前を披露する場所となった。

檜にまつわる習俗の中には、滋賀県朽木(クツキ)のように、正月の儀式が終わると神役から檜の小枝をもらい、これを苗代作りの時に田の畔に挿して、豊作を祈願するものがある。熊本県芦北町では正月のどんど焼きの時に、誰の山でもかまわず檜の枝を取り、これを焚いて燃え残りの枝を畑に挿して、モグラ除けにしたという。信州の木曾は昔から檜の産地で、江戸時代には『留木』(トメギ)として伐採が禁じられていた。このために今日に美林が残ったことは何とも皮肉である。



安曇野の田園の中で下界を見下ろすヒノキ(長野県安曇野市)。



安曇野の農家の邸内に植えられたヒノキ(長野県松本市)。



所沢の航空記念公園のサワラ。『木曾 5 木』の一つで、学名は『*Chamaecyparis pisifera*』。ヒノキのような芳香はないものの、殺菌作用があるので食物の敷物などに用いられる。またヒノキよりも成長が早く、柱などには不向きだが、桶や柄杓などに多く用いられる。



サワラの古木。ここは茨城県常陸太田市金砂郷(かかろ)町西金砂(かか)神社の境内である。



推定樹齢 400 年といわれる大応寺の大ヒバ。ヒバはアスナロのことで、本来はアテヒといわれた。アテとは高貴とか気品のあるという意味で、高貴なヒノキを意味する。しかし林業の世界ではアスナロといわずヒバということが多く。学名は『*Thujopsis dolabrata*』である(栃木市)。



植林された美しいヒノキ林(埼玉県寄居町)。ヒノキは植林してから伐採して用材になるまでには100年以上かかる。このためなかなか植林する人も減ってしまった。



ヒノキの雄花。これも花粉症の原因になる。

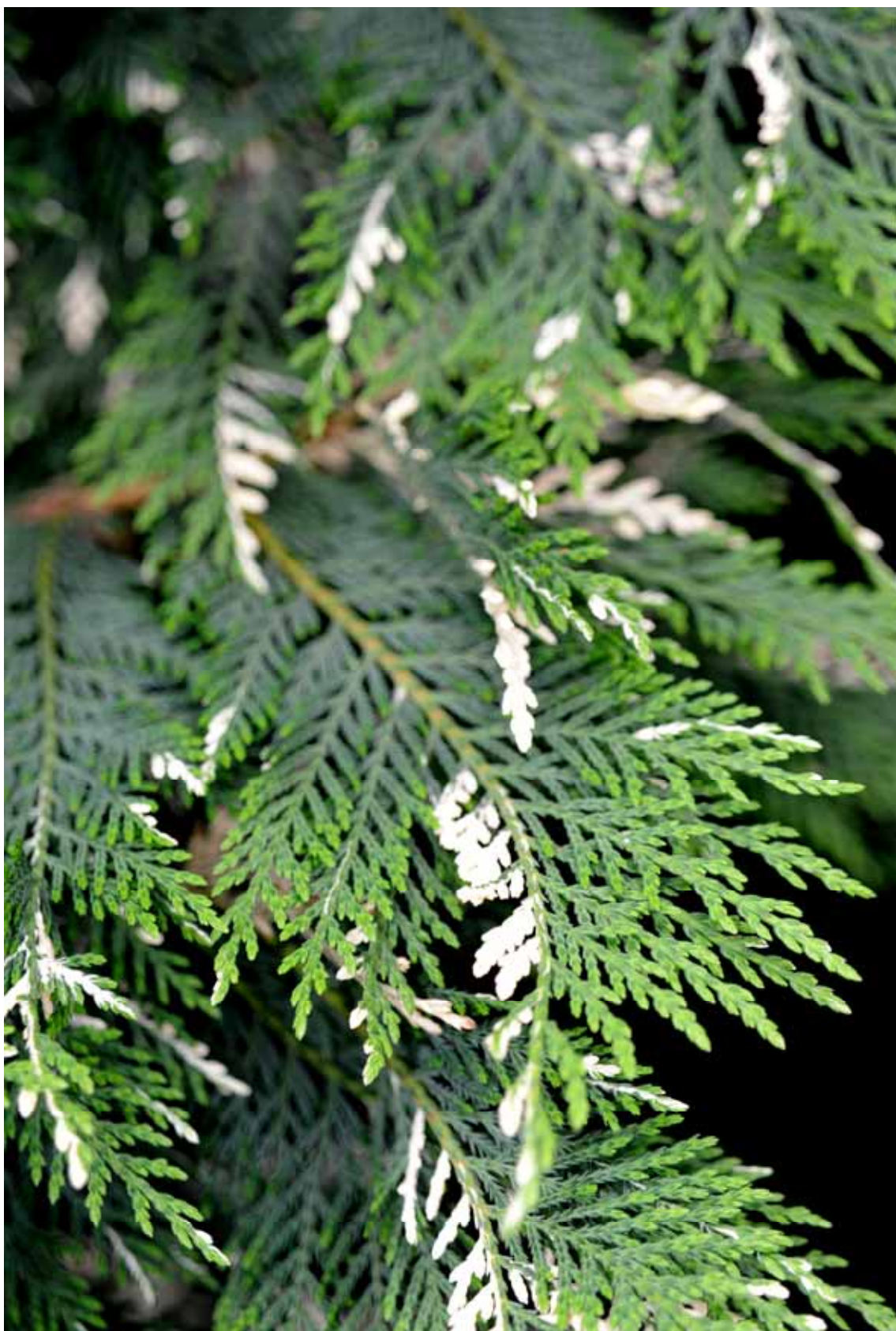




ヒノキの毬果、これを播種して苗木を作る(群馬県下仁田町)。しかし日本の林業は、輸入材との競争力がなくなり、せつかくヒノキといういい財産を持ちながらあまり役に立ってない。



サワラの毬果、ヒノキよりもいくぶん凹凸がある(東京都小金井公園)。



サワラの園芸品の中には、こんなふうに葉に白い斑が入る品種もある(東京都港区)。



近縁種のコノテガシワの毬果。学名は<sup>®</sup>*Platycladus orientalis*である(神代植物公園)。 [目次に戻る](#)